

---

# 仮面の皇子と棘のない花

巫女宮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面の皇子と棘のない花

### 【Nコード】

N8330K

### 【作者名】

巫女宮

### 【あらすじ】

ロロには秘密がある。それはルルーシュとナナリー、ミレイ、スザクしか知らない秘密と今あげた人は知らない秘密だ。

ゼロロロ で最終的にはルルロロ

## 注意書き

ゼロロロ 連載ですが最終的にはルルロロ です  
アンケートを投票していただく前に拍手を参考にしてと書きま  
したので文句を言われても責任はとりません！

CPはルルロロ やゼロロロ だけでなくロロが受けのものは他  
も存在します

例えばスザロロとか・・・

ですがルルーシュやゼロが受けはありませんしルルーシュやゼロ  
CPの相手はロロだけになります

それから基本はルルーシュ ロロ ゼロ ロゼリアであとからル  
ーシュ(ゼロ) ロゼリア(ロロ)になります

傾向はシリアス、甘、ギャグでギャグだと一部キャラが壊れます  
だれがというネタバレになるのでいいません(ヒント)  
それも含め嫌でしたらここでお帰りください！

## 設定

ロロ・ランペルージ

ルルーシュ達の親戚でA F学園では生き別れの兄弟となっている

ギアス持ち

ゼロがルルーシュだと知らない

本当の性別は女

本名はロゼリア

その時の一人称は私だわたしが心を開いていないものの場合わたくし

声も高いが男装しているので低くしていて、背は小さいが胸は大きいためさらしを巻いている

容姿は髪の毛は長くてストレートで女とバレないために後ろに束ねて鬘をかぶりアニメの髪にしている  
色は想像にお任せします

ある人の妹なためブリタニアの姓

それを知るのは父である皇帝と母とギアスを与えたV・V・とマリアンヌと自分から話したネオンとある人とあの人だけ

次のページはネタバレです。

嫌な方は飛ばしてください！

## 設定 2

このページを読んでいるということはネタバレをみたいということ  
ですね！  
それではどうぞ

ネタバレ

ある人とはクロヴィスのこと  
つまりロロの本名はロゼリア・ラ・ブリタリア

まだ物心着く前にV・V・に預けられ女であることを隠しブリタニアのために働かされていた

主に壊れるのは完全に血が繋がったクロヴィス・・・

ではなくシュナイゼル

シュナイゼルが知っているのはクロヴィスより年上で邸にいたから  
コーネリアも年上だが外で会えなく、知らないし、他の2人も知ら  
されていないので知らない。

シュナイゼルが知っている理由は本編で

## 序章

### 序章

ロロ「ハア、この姿はいいけどさすがにきついかな。」

そついうとさらしで巻いてある胸を触った

ロロ「兄さんは今日も遅いし、ナナリーも咲世子と出てるし、C・C・とマオはどっかいつてるんだろうから今は一人だけだし、

気分転換しにでもいこう。」

この判断がロロの人生を狂わすのであったがそれをロロは予想していなかった。

いいや、ロロと出会う人物も予想していなかっただろう。というか誰も予想できなかっただろう。

ネオンを除いては・・・

おわり



## 出会い

ロゼリア「ここまでくれば誰にもみつからないわね。」

ロゼリア基ロロが言っていることはゲッターです。

ロゼリア「いくらロロだとわからなくてもみつかったら元も子もないものね。」

暫く歩いていると黒い影がみえ、様子をみていたが、向こうもこちらに気づき目が合ってしまった！

ロゼリア（まずい！！目が合ったのに逸らしたら嫌な気分になるだろっし、逃げたら変に思われるし・・・

どうしたらいいのよ！）

? 「こんなところで何をしている! 危険だ、さっさと帰れ!」

ロゼリア「ビク…」

驚かしてしまったのに気づき優しい口調にした

? 「すまない、兎に角この辺は危険だ、帰ったほうがいい。」

ロゼリア「(この人は確か・・・)ゼロ?」

ゼロ「!!」

ロゼリア「・・・少し、私とお話しませんか?」

ゼロ「!何を言っているのかわかっているのですか?」

ロゼリア「ええ、いけませんか?」

ゼロ(無防備すぎる! 仕方ない、気分転換にきたんだし、少しだけならいいか。)

考えたあと答えを出した

ゼロ「いいいじょう。」

ロゼリア「嬉しい！私の名前はロゼリアです。」

ロロも自己紹介をし話し始めた

数時間後

ゼロ「大分時間が経ったみたいですね。私はこれで・・・」

ロゼリア「待ってください！」

呼び止められたゼロは歩くのをやめロゼリアに振り返った

ロゼリア「またこうして私と会っていただけませんか？（・・・  
って何言ってるのよ自分！）」

言った後で後悔していた；

ゼロ「いいでしよ。では同じ曜日の同じ時間。」

ロゼリア「はい。」

・  
ロゼリアの返事をきいたゼロは闇に溶け込むように消えていった・・・

そしてロゼリアは帰ったらネオンに相談しようと考えていた

おわり

## 密会

ゼロと会ってからロロは生き生きとした表情をしていた

そして一週間後の今日、ゼロと会う日・・・

ロゼリアが約束の場所に来たときには既にゼロがいた

ロゼリア「・・・お待たせしてしまいましたか？」

ゼロ「いや、ちょうど今来たところだ。」

ロゼリア「それならいいのですが・・・」

・・・

会話が続かない・・・

ロゼリア「どうして私と会う約束をしてくれたんですか？」

ゼロ「ただの気紛れです。」

ロゼリア「そうですか……」

ゼロ「……貴方こそどうして私と？」

ロゼリア「それが私にもわからなくて……何故でしょうね。」

ゼロ「貴方がわからないことを私がわかるわけありませんよ。」

ロゼリア「そうですね。」

とまあ最初は気まずかったがだんだん会話になっていった

ゼロ「もうこんな時間だ。」

ロゼリア「では。」

ゼロ「ああ。」

そしてまたお互い別れた





それから何度も何度も二人は会っていた

そしてある日・・・

□□「ただいま」

ネオン「おかえり。」

□□「ネオンさん！」

ネオン「どうだった？ゼロとの密会は？」

□□「密会だなんて！ただ会って話しただけですよ。」

ネオン「あのね、男女が人目を避けて会うことを密会っていうの、これはまさに密会なんじゃない？」

□□「し、し、仕方ないじゃないですか／＼ゼロは世間で騒がれてるんですから。」

ネオン「なら何故会う約束をしたの？」

□□「・・・」

ネオン「□□？」

□□「・・・わかりません。」

ネオン「・・・そう・・・。」

沈黙が流れ始めたときルルーシュが帰ってきたので話は打ち切りになった



□□の部屋にて・・・

□□（僕自身、理由がわからない・・・それに喋り方だって、一人称だって素で話してしまった。）

わからないことだらげだよ。。。  
（

□□は何度も会ううちに自分の心がわからなくなっていた・・・

ネオンサイド

ネオン（ロロは自分の気持ちに気づいていないわね。まあ初恋もまだなんだから仕方ないか。問題は相手なんだよね）

問題ありすぎよ。ロロだっていえないことあるし。どうなるのかしらね、この恋・・・）

ネオンはネオンで心配していた

おわり

## 恋　ロロ総受け

ロロ「ハア」

あの日からロロはずっと溜息をついていた。

未だにそれが恋だと気づく気配がありません

スザク「ねえルルーシユ。」

ルルーシユ「なんだ？」

スザク「ロロどうしたの？」

ルルーシユ「さあな。」

スザク「さあなつて君の弟だろ?。」

ルルーシュ「ああ。だが口口は何も言ってくれないんだ!。」

ルルーシュが大きな声を出したため皆そちらに視線を向けた

ルルーシュ「コホン・・・聞いてもこたえてくれなくてな。」

スザク「ルルーシュでもお手上げてことか?。」

ルルーシュ「なんだその目は?。」

スザク「別に。」

その時のスザクの目をみてルルーシュは嫌な予感がしました





ロロ（僕本当にどうしたんだろ）あの人のことばかり考えて手につかないし、ドキドキしちゃうし・・・）

？「ロロ」

悩んでいたロロに声をかけて人がいました

ロロ「会長。」

それはミレイでした

ミレイ「なに辛気臭い顔をしてるのよ。何か悩みがあるなら私に  
ってちょうだい」

そういわれ、ロロは少し考えた

ロロ（この人のことだから絶対からかわれる！）

と思っていました

恋だと気づいていなくてもそういつ予感短い付き合いでしたが嫌  
ってほどわかってるロロなのでした・・・

ロロ「大丈夫ですから。」

そういつてロロは立ち去った



？「□□」

またまた□□が歩いている時に声をかけられた

□□「・・・何ですか？」

スザク「困ったな。僕は君を困らせるような事をしたかな？」

□□「貴方の存在自体がそうです。」

スザク「ひどいな」

□□はスザクを無視し歩いていった

ジノ「なあ、口口。」

今度はジノに声をかけられたりと続いてやっと授業が終わり解放された

おわり

相談、そして・・・ゼロゼロ

□□（皆にしてなんなんだろう。）

□□は鈍感なので皆の思いに気づいていなかった

トントント

□□「誰ですか？」

ネオン「ネオンよ。」

□□「ぎんぎん。」



ロロはネオンにならと思ひ許可をした

ロロ「どうしたんですか？」

ネオン「それはこちらのセリフ。何か悩んでるんでしょっ？」

ロロ「どうして・・・」

ネオン「ロロはわかりやすいし、みんな・・・特にルルーシュが心配してたから。」

ロロ「そうですか・・・」

ネオン「言えばすつきりするわよ。」

ロロ「・・・あの、ある人の事をずっと考えてしまったり、その人のことを考えるとドキドキしてしまうのは何故ですか？」

ネオン「それは恋ね。」

ロロ「恋？」

ネオン「そうよ。その人のことを考えると時には胸を締め付けられたり・・・」

□□「恋・・・」

ネオン「誰に恋をしたの？」

□□「・・・誰にもいわないで下さいね。特に兄さんには・・・」

ネオン「わかってる。ルルーシュはシスコン、ブラコン・・・特にブラコンの方だからね（笑）」

□□「そうですね（笑）僕が好きになったのは・・・実はゼロなんです。」

ネオン「ふ〜ん（ゼロって事はルルーシュね・・・）」

□□「ふ〜ん」ってそれだけですか？」

ネオン「反対してほしいわけ？」

□□「違いますけど・・・」

ネオン「私はいいと思うけど。恋愛は自由なわけだし。□□はゼロが誰か知ってるの？」

□□「いいえ、知りません。」

ネオン「そう・・・まあいいんじゃない。話してくれて有難う。」

□□「こちらこそ有難うございます。」

ネオン「いえいえ、じゃあいくわね。」

そついでとロロの部屋から出て行った

ルルーシュ「どうだった？」

ネオン「悩みは解決したけど新たな悩みがでてきたみたい。」

ルルーシュ「なんなんだそれは!!！」

ネオン「ロロと約束したから言わない。」

ルルーシュ「そこを何とか。」

ネオン「ロロに嫌われてもいいなら……」

ルルーシュ「うっ。」

ネオン「じゃあ駄目ね。」

ネオンの一声で黙ったルルーシュ

ルルーシュ「……兎に角有難う。」

ネオン「私もロロが心配だったし。」

ルルーシュ「しかし何故ロロは俺に言わないんだ……」

ネオン（それはあんたがロロのことになると壊れるし、自分も恋に鈍感なんだから悩みは解決しなさそうじゃない。）

あえて口には出さず心の中で思っていた

ネオン「私は寝る。」

ルルーシュ「ああ、本当に有難う。これからもロロの力になってや  
つてくれ。」

俺はゼロとしても頑張らなきゃいけないからな。」

ネオン「わかってるって。でも私も騎士団の人間よ。」

ルルーシュ「戦争はないから平気だ。」

ネオン「そう。」

その返事を聞くとルルーシュは部屋に戻った

ネオン（ロロもそうだけどルルーシュもロロがロゼリアだと知った  
らどつするんだろっね〜）

暢気に考えながらネオンも自室に戻った



ロロ「ネオンさん！」

ネオン「なに？」



ロロ「僕、ずっと考えていたんです。あの人に恋をしているとわかってから役に立ちたいと！それで・・・」

ネオン「騎士団に入りたいと？」

ロロ「！！よくわかりましたね！」

ネオン「私には黒魔術と読心術があるからね。」

そうなんですよ、ネオンにはそれがあるのでわからないことはないです！

ロロ「お願いできませんか？」

ネオン「いいわよ。」

かる（（

ロロ「有難うございます！」

ネオン「調度集まりがあるからその時にね」

ロロ「はい。」

こうしてネオンによってロロは騎士団に入ることが決定したが、ゼロの許可はいいのだろうか・・・

ア  
ジ  
ト

トントン

ゼロ「誰だ？」

ネオン「私だけど、入団希望者を連れてきたわ。」

ゼロ「入団希望者？」

ネオン「ええ。」

ゼロ「まあいい、入れ。」

ゼロの許可を得て扉を開けた

ゼロ「・・・なっ！」

ネオン「この子が入団希望者よ。」

ロゼリア「どうも。」

ゼロはロゼリアをみてあわてていた

ゼロ（どういうことだ！！何故彼女が！ネオンと知り合いだったとは・・・）

ネオン「許可してくれるよね？」

ゼロ「いくつか質問をしてからだ。入団の動機は？」

ロゼリア「私は見ての通りブリタニア人だけど、ブリタニアに賛成することが出来ないの・・・」

ゼロ「だからって君みたいな子が入るのは賛成できない。」

ロゼリア「では今までのように黙ってみているとおっしゃるのですか？」

ゼロ「そうだな。何も出来ないのがいては迷惑だ。ただでさえここは日本人の集まりだからな。」

そういわれロゼリアは唇を噛み締めた

その時ネオンが口を開いた



ネオン「出来るよ。」

ゼロ「何？」

ネオン「だから出来るって。」

ゼロ「馬鹿も休み休み言え。」



鼻で笑われ、そういわれた

その行動と言葉にカチンときた口は口を開いた



ロゼリア「ナイトメアに乗ることが出来ます（それにギアスがある  
し）。」

ゼロ「なに？」

ロゼリア「ですからナイトメアに乗ることが出来ます。専用ので名前はヴェンセントです。」

ゼロ「君のような少女が何故？」

ゼロの疑問もわかりますね〜

ネオン「それはこの子が私の弟子だからよ！」

〜トドトド〜

ゼロ「は？」

ロゼリア「!？」

ネオン「なんか文句アル？」

ゼロ「・・・いや・・・乗れても問題は技量だ。それがなければ騎士団に入れることは出来ん！」

ネオン「私の弟子なんだから大丈夫よ。」

ゼロ「お前の弟子だろうが周りは納得しない。納得させて入団するためには実践が必要だ。」

そっついゼロは皆を集めた





玉城「何か用かよゼロ」

ゼロ「入団希望者を連れてきた。」

玉城「入団希望者！！また後輩が出来るのか」

ゼロ「その入団希望者はブリタリア人だが技量は申し分ないらしい。それを確かめるために実践を行う。」

ザワザワ

玉城「どういうことだよ！ブリタリア人なんて今居るので十分だろ」！

扇「玉城の言うとおりだと・・・」

ゼロ「皆の言い分もわかるが1人は製造、もう1人は情報だ。今回はそのどれでもない。それにネオンの弟子だ。」

ザワザワ

ただでさえブリタリア人の入団とだけでザワザワしていました  
が今度はネオンの弟子と聞いてザワザワしはじめました。





カレン「ネオンの実力は確かなもだからその弟子も確かなものなんだろうけど・・・」

ネオン「何か文句でもあるの？」

玉城「大有りだ！これ以上ブリタニア人が「玉城！」ぜ！・・・なんだよ。。。」

ネオン「こういっちゃあ何だけどカレンだって半分はブリタニアの血が流れているのよ？」

玉城「でも半分は日本人の血だろう！」

ネオン「そうね。でもブリタニアの血も流れている。それにラクシヤータだって、デイトハルトだって、いるんだから、

今さらブリタニア人が増えようが関係ないでしょ。ましてや使えるんだから。

カレンが半分じゃなく全ての血が日本人の血がいいと同じように、中にはブリタニアの血を嫌っている人だっている。

その中の1人なのよ？入団希望者は日本人だけというルールはあったかしら？」

玉城「それは・・・」

ネオン「貴方達が意見をいっても最終的に決めるのはこのボスの

ゼロだわ。」

カレン「そうね、ネオンの言うとおりだわ。私はゼロが決めたのから依存はありません。」

ゼロ「話はまとまったようだし、入団テストを行う。」

玉城「俺にやらせてくれ！」

そういつて玉城が相手になった

結果は・・・







玉城「女のくせに強いな！さすがネオンの弟子だな。俺様を負かせ  
ないくらいじゃあ騎士団ではやっていけないからな。」

ロゼリア「は、はあ。」

ロゼリア・玉城以外（調子が良すぎ）

ゼロ「文句はないな。」

玉城「おう！」

扇「俺もだ。」

南「仕方ないな。」

杉山「可愛いしな。」

井上「女同士仲良くしましょう。」



次々とロゼリアに挨拶をした

こうしてロゼリア（ロロ）は黒の騎士団の一員になった！

正体 ルルロロ

ロロ（これからどうすればいいんだろう・・・ゼロにこんなことを言ったら一刀両断されそう）（苦笑）

ロロは恋の自覚をしてからもずっと悩んでいた。

ネオンが応援してくれていても相手はテロリストのリーダーで自分は紹介はされていないが皇女だから・・・

ロロ「（諦めた方がいいのかな）（ハア）」

ルルーシュ「どうしたんだ？」

ロロが溜息をついているとルルーシュに話しかけられた

ロロ「兄さん!？」

ルルーシュ「何か悩みがあるんだろう？俺に言ってみる。」

ロロは困った。いくら兄とはいえ、自分がテロリストに恋をしていることを話したら・・・と思うと気が気でなかった。

だが、有無を言わさないルルーシュの突き刺さる視線にゼロだと言うことや

テロリストだということをお話さないでいってみようとしたが・・・

ルルーシュ「いえないようなことなんだな。」

ロロ（ビク！）

ルルーシュ「そうか・・・なら無理に聞かないよ。」

ロロ「兄さん？」

ルルーシュ「俺も人のこといえないからな。」

ロロ「兄さん。」

ルルーシュ「ただな、俺たちには血の繋がりがなくてもお前は俺たちの家族で俺の弟だ。」

だから全てとはいえないが悩みがあるならいつてくれ。」

ロロはその言葉をききこころ思った

ロロ「兄さんは僕のことを僕が考えている以上に思っていてくれたんだ……」有難う兄さん。」

ルルーシュ「お礼を言われるようなことはいっていない。」

ロロ「それでもいいんだ。こんなに僕を心配してくれて……」

ルルーシュ「家族だからな（微笑）」

ロロ（ドクン）

ロロはルルーシュの微笑みにわけもわからずドキドキしていた。

ロロ（どうしたんだろう……兄さんを見てたら急に……まさか……そんな……僕が好きなのはゼロなのに……）

どうしたらいいんだろう。（）

ルルーシュ「ロロ？」

急に下に向いたロロを心配して覗き込んだルルーシュ

ロロ「なっなんでもない。もう戻るね。」

そういつてロロは自分の部屋に駆け込んだ。

その様子を見てルルーシュは思った

ルルーシュ「変な奴だな。」

プルルル

ロロ（兄さんの笑みをみてドキドキして自分の気持ちに気づいたけど、僕は一体どっちが好きなんだろう・・・）

ロロはそんなことを考えてあることに思い出した。

そしてリビングに戻っていった

ルルーシュ「~~~~」

ロロ（誰かと話してるようだ。）

そう思い引き返そうとしたとき・・・

ルルーシュ「そうか、わかった。ご苦労だったな扇。ではまた・・・

」

ロロ（どういうこと？兄さんの声、ゼロみたいに低かったし、扇さんを呼び捨てにしてたし・・・

それだけじゃなく日にちと場所が次の黒の騎士団の活動の日と場所だ！これは偶然？・・・まさかね。）

ロロは自分の考えが外れているかと思ってたがそれは当たっていたと知ることになる





C・C・「おいルルーシュ、今回うまくいくのか？」

ルルーシュ「どういう意味だ？」

C・C・「口口のことか悩んでいるだろう。作戦に支障をきたせば失敗に終わる。」

そうならば今まで築きあげてきた信頼は駄目になるな。」

ルルーシュ「俺がそうさせるとでも？」

C・C・「さあな。お前が作戦に成功しようが失敗しようが、ゼロの信頼がなくなるのが知ったことではない。」

ロロ（！！ゼロ！？）

ついにロロはゼロの正体がルルーシュであることを知ってしまった

それからロロは呆然として部屋に戻ってきた

ロロの悩みはまた1つ増えたようだった。

そしてそれからルルーシュを避けるようになった

おわり

回避 口口総受け

それからのこと・・・

ルルーシュ「(おかしい・・・おかしいぞ!)」

ナナリー「どうしたんですか?」

ルルーシュ「!ナナリー・・・なんでもないよ。」

ルルーシュはナナリーを心配させまいと嘘を言った

ナナリー「・・・ロロお兄様のことですね。」

無駄だったようだが・・・

ルルーシュ「!?ああ。最近避けられている気がして、最初は気のせいかと思ったんだが気のせいではなかった。

俺は知らない間に口口に嫌なことをしたみたいなんだが記憶にないんだ。」

ナナリー「そうですね・・・きっと口口お兄様にも事情がありますわ。ですからお話していただけるまで待ちましょう。

(今回は譲ってさしあげますわね)

ルルーシュ「そうだな。(あいつらには悟られないようにしないと。長期戦になりそうだ。)

ロロがルルーシュを避けていることは周りにも知られていた（笑）

ジノ「なあ、スザク。」

スザク「なんだい？」

ジノ「最近ロロガルルーシュ先輩と一緒にいるところをみないよな？」

スザク「そうだね。」

ジノ「じゃあさ、チャンスじゃね？」

スザク「今頃気づいたのかい（黒笑）」

ジノ「ああ！」

スザク「馬鹿だね、まあ気付かなきゃ僕がロロを独り占めしたのに（黒笑）」

ジノ「ス、スザク？」

スザク「チツ（激黒）」



あのスザクが黒くなったことにさすがのジノも焦った

ミレイ「ねえ知ってる?」

シャーリー「なにがです?」

ミレイ「ロロがルーシュを避けてるっちは・な・し」

シャーリー「はい、聞きました。ね、カレン?」

カレン「ええ。」

ニーナ「うん。」

リヴァル「俺の耳にもちゃんと届いてますよ、会長」

ミレイ「じゃあ、チャンスよねVV」

シャーリー「／／／何言ってるんですか!?!」

カレン「そうよ／／／」

ニーナ「／／／」

リヴァル「俺の話は？」

スルーされ、ここでも同じ話題が・・・

皆口口狙いなので嬉しいようです(笑)

一方の口は・・・

□□「はあ〜」

ネオン「大丈夫？」

□□「まあ。」

ネオン「そうにはみえないけど？」

ロロ「どうしたらいいのかわからなくて・・・」

ネオン「見えてないものがみえたから？」

ロロ「はい。」

ネオン「・・・そう言うときこそ巻き毛を使うのよVV」

ロロ「ネ、ネオンさん？」

ネオン「あなたのお父様に相談するの！」

ロロ「え！？無理ですよ！」

ネオン「どうして？」

ロロ「だって皇帝ですよ！！そんな人が僕なんかのために時間を割くわけじゃないですよ（苦笑）」

ネオン「そういうときにしか役に立たないんだからいいじゃないVV

（それにあのロールケーキはロロを溺愛してるから例えどんなことがあってもロロの悩みやいうことを聞くわよ。）

ロロ「そうでしょうか？」

ネオン「そうよ。そうと決めればいきましょー！」

そう言ってネオンは口口をシャルル・ジ・ブリタニアの所まで連れて行った

終わり

## 相談

ネオン「着いたわよ。」

ロゼリア「……」

ネオン「シャルルに相談する前に彼らに会いに行きましょう」

ロゼリア「？」

ネオン「貴方のお兄様と貴方を溺愛している人たちよ（^^）」

ロゼリア「もしかして……」

心当たりがあるロゼリア

ネオン「さあ、いきましょーう。」



ネオンに着いていったロゼリア

ネオン「久し振り、シュナイゼル&クロヴィス。」

その部屋にいるであろう人物に声をかけた

シュナ「やあ。」

クロヴィス「久しぶり。」

2人は挨拶した

シュナ「ロゼリアも久し振り（^^）」

挨拶をして頬にキスをした

ロゼリア「シュ、シュナイゼルさん／＼／」

シュナ「シュナイゼルさん」だなんて他人行儀だね。昔みたいに呼んでごらん？」

ロゼリア「シュ、シュナ兄さん。」

シュナ「よくできました。」

今度は頭を撫でた

クロ「シュナイゼル兄さん、ロゼリアは私の妹ですよ？私の妹をか  
らかわないで下さい。」

今まで黙っていたクロヴィスが言った

シユナ「からかってはいないよ。これは愛情表現さ。」

本人は否定していたがどうみてもからかっているようだった。







ネオン「長居は出来ないけどそれぞれ過ごしてみたら？」

シュナ「そうだね。最初は私でいいかい？」

クロ「いいですよ。」

シュナ「なら行くところか。」

ロゼリアの意思を無視してそうきめ、ロゼリアはシュナイゼルにエスコートされるままに部屋から出て行った

ロゼリア「シュ、シュナ兄さん？何処へ行くの？」

シュナ「2人だけで話せるところだよ。誰にも私の可愛いロゼリアとの会話を邪魔されたくないからね。」

ロゼリア「か、可愛い／＼／そんなことないです！私より可愛い人は沢山います。」

シュナ「私にしてみたら君以上の子はいないよ。」

ロゼリア「シュ、シュナ兄さんたら／＼／」

シュナ「着いたよ。」

シュナイゼルと話している間についたようだ

シュナ「父上に会いに来たことは知っているが嬉しいよ。」

ロゼリア「今度はシュナ兄さんに会いに行きます。」

シュナ「君は優しいね。」

ロゼリア「私が？」

シュナ「自覚がないのか。まあいいさ。学校はどうだい？」

ロゼリア「？それなりに楽しいです。会長さんが色々なイベントを用意してくれているので。」

シュナ「そうか・・・なら良かった。」

当然真剣な瞳になった

シュナ「いいかい、私のレディ。どんなことがあっても私は君の味方だ。そして誰に責められようが君は胸をはっていい。」

ロゼリア「？はい。」

シュナ「時間だね。」

そう言って戻っていった。

暫くして・・・





クロ「お待たせ。」

ロゼリア「いいえ。」

クロ「こうやって話すのは何年ぶりだろうか。」

ロゼリア「そうですね……」

クロ「敬語やめてくれないか？」

ロゼリア「え？」

クロ「私達は同腹の兄妹じゃないか。」

ロゼリア「・・・そうだね。クロ兄。」

クロ「懐かしいな。」

ロゼリア「そうだね。」

クロ「色々あったからな。」

ト  
ト  
ト

ネオン「時間よ。」

クロ「もうか・・・」

ロゼリア「ごめんなさい。」

クロ「ロゼリアが謝ることじゃないさ。いいかロゼリア、例え誰が何と言おうとお前は私の妹だ。外野の言葉など無視しなさい。」

ロゼリア「それ、シュナ兄さんにも言われた。」

クロ「そうか・・・」

ネオン「行くわよ。」

そう言っ  
て2人は  
出て行っ  
た





ネオン「ネオンとロゼリアだけど入っいていい？」

？」「うむ。」

ロゼリア「失礼します。」

そこで待っていたのは現皇帝シャルル・ジ・ブリタニアだった。

シャルル「よく来た。」

ロゼリア「あの・・・」

シャルル「言わんでいい。ネオンから聞いた。」

ロゼリア「そうですね・・・」

シャルル「ずっと考えていたがみなの前に出る気はないか？」

ロゼリア「!？」

ネオン「それはつまり公表するということね。」

シャルル「ああ。」

ロゼリア「私を？」



シャルル「ああ。そして改めて自己紹介してみる。必ず意味がある。」

ロゼリア「・・・」

それはどついつ意味なのでしょう？

ネオン「私もついてるから平気よ」

ロゼリア「……分かりました。お願いします。」

シャルル「うむ。」

「……して皆で自己紹介するようになった。」

紹介

ルルーシュ「全くなんなんだ。」

ナナリー「お兄様。」

ルルーシュ「ロロが心配だというのにあの親父。」

ネオンが置手紙にロロと旅行に行くからと書いたのが気に入らない

ようだ。

ナナリー「ロロお兄様なら大丈夫ですよ。ネオンさんと一緒なんですから。」

ルルーシュ「だから心配なんだ。」

ナナリー「？」

ルルーシュの言っている意味がわからないナナリーだったが父親であるシャルルに呼ばれシャルルがいるであろう場所についた

ルルーシュ「入りますよ、父上。」

シャルル「ああ。」

中にはルルーシュとナナリー以外の兄弟がいた。

ユフィ「お久し振りです。ルルーシュ、ナナリー。」

ルルーシュ「ユフィ！？それに貴方達も！！」

ナナリー「ユフィお姉さま（^^）」

ルルーシュは驚きながら、ナナリーは嬉しそうにみていた



再会を楽しんでいたがシャルルが口を開いた。

シャルル「お前達を集めたのは他でもない。お前達の妹を紹介する  
ためだ。尤もナナリーとカリーヌにとっては姉だな。」

シャルル・クロ・シュナ・ナナリー以外「妹（姉）！？」

ナナリー「他にもお姉様がVV」

クロヴィスとシュナイゼルはあの子だと思っていた。

キ  
ー

シャルル「入ってまいね。」

ドアが開き、入ってきたのはご存知

ルルーシュ「!?!」(ロゼリア!?!)」

ルルーシュはゼロの時に会ったロゼリアに驚いた。

シャルル「紹介しよう。クロヴィスの妹のロゼリアだ。」

ロゼリア「初めまして。」

ルルーシュとシャルル、当の本人以外の反応はこうだった。



ナナ・クロ・シュナ以外「可愛いVV」

反応がよかった。

ナナリー「!?!? (え? ロゼリア? ロロお兄様でなく?)」

ナナリーはギアスは持っていないが、目に見えるが誰の足音かわかるのでロゼリアがロロだということに気付いていた。

そしてロゼリアは女性軍ナナリー以外に着せ替え人形にされていた（笑）



## 告白

ナナリー「ロゼリアさんは私が思うようにロロお兄様ではないの  
でしょうか？確かめましょう。」

そう思うとナナリーはロゼリアに会いに行った。

ナナリー「ロゼリアさん。」

ロゼリア「ナナリー？」

ナナリー「ロゼリアさんはロロお兄様ですよね？」

ロゼリア「!？」

ナナリー「そうなんですネ。」

ロゼリア「どうして？」

ナナリー「それは私がロロお兄様が好きだからですわVV勿論恋愛感情で。」

ロゼリア「僕を？」

ナナリー「はい。」

ロゼリア「僕は・・・」

ナナリー「知っています。お兄様がすきなんですよね。でしたら告白してください。」

ロゼリア「無理だよ。」

ナナリー「どうしてですか？」

ロゼリア「それは・・・」

ロゼリアは理由がいえなかった。何故ならナナリーはルルーシュがゼロだと知らないから・・・





沈黙が続いたがそれを破ったのはナナリーだった。

ナナリー「お兄様がゼロだからですか？」

ロゼリア「!?!?どうしてナナリーが!」

ナナリー「お兄様のことですから。私はロロ・・・ロゼリアお姉様の幸せも祈っています。ですから・・・」

ロゼリア「わかった。兄さんに言うよ。」

ナナリーの言葉でルルーシュに告白することにしたロゼリア。ルルーシュを探しにいった。





ロゼリア「ルルーシュお兄様。」

ルルーシュ「・・・君か。」

ロゼリア「ごめんなさい。」

ルルーシュ「どうした？」

ロゼリア「僕だよ、兄さん。」

ルルーシュ「!?ロ、ロロ!?!」

ロゼリア「うん。実は僕は女だったんだ。騙っていて御免。」

ルルーシュ「・・・」

ロゼリア「兄さんがゼロだということも知ってるんだ。」

ルルーシュ「!?!」

ロゼリア「偶然知っただけどね（苦笑）」

ルルーシュ「・・・」

ロゼリア「・・・」

ここでも沈黙が続いた。

ルルーシュ「隠していた理由は？」

ロゼリア「僕を知るのはごく一部だからね。」

ルルーシュ「そうか・・・」



またもよ沈黙

ロゼリア「兄さん。僕は貴方を騙していたけど、僕が兄さんのことを好きだという気持ちは嘘じゃないよ。」

ルルーシュ「!？」

ルルーシュに告白した口口。結果は次の話で

和解

ロゼリア「兄さんは僕のことを好きじゃないって分かってるから返事はいいよ。」

そう言って立ち去るつとしたロゼリア

ルルーシュ「待て。誰がそんなことをいった。」

ロゼリア「兄さん？」

ルルーシュ「俺も好きだよ。ロゼリア」

ロゼリア「！？兄さん。」

ルルーシュの返事を聞いたロゼリアはルルーシュに抱きついた。  
両思いになってよかったね（＾　＾）

このあと皆にからかわれたが幸せそうな2人がいた。

それから2人は結婚し、子供も産まれた。  
3人・・・



2人は子供や孫に囲まれてとても幸せな毎日を送り、その生涯を閉じた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8330k/>

---

仮面の皇子と棘のない花

2011年3月8日20時52分発行